

“豊かな島” 豊島を再発見！観光資源マップ作り ～続 エコ・ツーリズムによる豊島の地域活性化プロジェクト～

代表者 田中 美理 (経済学部地域社会システム学科 4 年)

1. 目的と概要

豊島の活性化と、自分たちが卒業後、地域活性化を担う人間となるために、豊島の年中行事に参加・協力し、住民と交流しながらの観光マップづくり（昨年度は調査中心、今年度は実践）。

2. 実施期間（実施日）

平成 20 年 4 月 1 日 から 平成 21 年 3 月 31 日まで

平成 20 年	4 月	豊島	お大師さんのお祭り
	5 月	〃	清掃活動への参加
	6 月	〃	田植え
	7 月	高松	今後の活動に関する打ち合わせ
	8 月	豊島	鶏の解体・豊島の食文化の聞き取り調査
	〃	〃	スタジイの森歩き・植物調査
	9 月	熊本	みなまた環境大学
	〃	豊島	竹の間伐・そうめん流し・島 1 周クルージング
	10 月	〃	バーベキュー・稲刈り
	11 月	〃	住民への個別インタビュー
	〃	高松	住民への個別インタビュー
	12 月	豊島	地元学実践
	〃	新潟	越後妻有視察
平成 21 年	1 月	豊島	餅つき
	2 月	高松	今後の活動に関する打ち合わせ
	〃	豊島	今年度の活動総括・まとめ
	3 月	〃	活動報告会
	〃	〃	来年度の活動に関する打ち合わせ

3. 成果の内容及びその分析・評価等

この活動は、昨年度から継続して行っているものである。

昨年度は豊島での活動初年度であったため、まずは豊島の住民が何を考え、何を望んでいるか調査することが今後の活動にもつながっていくと考え、豊島全戸アンケート調査を行った。そして、そのアンケート集計結果により、①島内の少子高齢化、②豊島の「自然」と「新鮮な農産物・魚介類」を島民の方が誇りに思っていること、③荒れた田畑や空き家を悲しく思っていること、④それらの景観整備に関心を持っていること、⑤特産品の必要性、などが分かった。そして、この集計結果以外に、実際に自分たちで豊島を歩いてみることによって、豊島の「自然の豊かさ」と「人柄の良さ」を様々な面で知ることができた。よって、これらの魅力を活かした地域づくりこそが、これから目指す方向だとアンケートにより導き出せた。

そして今年度は、アンケートを通して見えてきた豊島の魅力を追求・深めることを中心に行った。「自然の豊かさ」を深める方法としては、豊島で地域活性化活動に取り組んでいる農事組合法人てしまむらのみなさんと協力し、エコ・ツーリズムのモデルツアー、絵地図づくりを行った。また、「人柄の良さ」を深める方法としては、3人の豊島住民にインタビューを行った。

* 豊島の「自然の豊かさ」を深める

「米作り」を年間を通して行った。5月に田植えの前段階として、田んぼに水を行き渡らせるための水路清掃、6月に田植え、10月に稲刈りを行った。

田んぼのある場所は、瀬戸内海やその島々が見渡せる大変景色の良いところだった。そのため気持ちよく作業ができたし、海を眺めながら田植え・稲刈りができる場所はとても珍しいと思う。また改めて豊島の自然の豊かさを実感し、豊島の個性も知ることができた。



水路清掃の様子



稲刈りの様子。

社会人や小学生も一緒に手で刈った。

また、9月に行った竹の間伐と流しそうめんを楽しむモデルツアーでは、竹の間伐をして、その竹で流しそうめんの土台や器、箸を自分たちで削って作った。島の湧き水を使っての何とも贅沢な流しそうめんだった。

このモデルツアーでは、不要になった竹から様々なものを作り出すことができた。よって、ただの竹林も工夫すれば素材になりうるということから、素材は島中に転がっていると思った。

他には、鶏の解体・試食、スダジイの森の植生調査、島1周クルージングなどを行った。今後はこれらのツアーを、一般人も参加できるような形にしたいと考えている。



一方で、9月には熊本県水俣市で開催された「みなまた環境大学」に参加した。みなまた環境大学とは、水俣市全体がフィールドとなり、環境問題やまちづくりについて考える1週間のセミナーで、全国から35名の大学生や社会人が参加した。なぜこのセミナーに参加したかという、水俣市は水俣病の経験を教訓として、環境都市としてのまちづくりを実践している。よって、産業廃棄物不法投棄の過去を持ち、そこから立ち直ろうとしている豊島と何か通じる点があるのではないかと、また、水俣のまちづくりに豊島は学べる点があるはずと思い、参加した。

このセミナーでは、水俣病の歴史を学ぶとともに、水俣市はどのようにして水俣病から立ち直っていったかを知ることができた。そして、立ち直っていく中で「地元学」の存在が必要不可欠だったのではないかと考えるに至った。

地元学とは、その名の通り「地元で学ぶ」学問で、地元に住んでいる人が主体となって、地

元外の人と一緒に地元のことを学ぶことを言う。そこに住んでいる人にとっては当たり前の生活でも、地元外の人にとっては、それが「新鮮」で「価値」のあるものだったりするので、地元学の中では、その「新鮮」で「価値」のあるものを探す。なぜなら、その「新鮮」で「価値」のあるものこそが、その地域の「個性」であり、「個性」を知ると、地元で自信と誇りが生まれるからだ。そして、その自信や誇りが、独自の地域づくりにつながるものとなる（地域づくりの基盤となる）と地元学では考える。



みなまた環境大学の参加者と、
完成した絵地図

そしてこのセミナーでは、水俣で「あるもの探し」を行い、絵地図づくりを行った。

地域の個性を知ることにより地元への誇りが生まれ、その自信が独自の地域づくりにつなが

っていくと説いた地元学。みなまた環境大学で地元学を学んだ私は、豊島にも地元学の取り組みを取り入れたいと思い、住民とともにこれを12月に実践した。地域を豊島の唐櫃岡集落に絞り、暮らしと景観を中心に調査した。そしてこれが完成した絵地図である。



現在はまだ唐櫃岡集落の絵地図しか完成していないが、今後は他の5集落についても作成する予定である。

* 豊島の「人柄の良さ」を深める

砂川三男さん、兒島晴敏さん、石井亨さんの3人にインタビューを行った。この3人は産業廃棄物不法投棄事件の際には先頭に立って活動していて、現在は農事組合法人てしまむらに属し、地域活動に積極的に取り組んでいる。インタビューは主に、これまでの人生や、豊島での暮らし（自給自足の生活など）、これからの豊島はどうあっていくべきかを尋ねた。3人ともインタビューと言えば産廃関係のことを聞かれることが多かったらしいので、有意義なインタビューとなった。



この中でも特に印象に残っているのが、兒島晴敏さんのインタビューの中で出てきた話である。

「日本を体に例えてみる。東京が頭だとしたら、豊島は指の先かもしれない。足の裏かもしれない。

だけど、指の先に傷があったら、足の裏にマメがあったら、その体は本当に健康と言えるのか？頭は傷に対し、感じないふりをするのか？

豊島が、離島が、地方が苦しんでいるとき、東京は何をしているんだ？」

児島さんだけではなく、豊島にはこうやって考えさせられる話をされる方が多い。それはやはり、産廃事件に人生をかけて携わり、大きなものを相手にして生きてきた方がたくさんいるからだと思う。アンケートの際には「アンケート配布・回収の際にたくさんの差し入れをもらって嬉しかったから、豊島には優しい人が多い」と感じるだけであったが、こうやってインタビューをして、もっと深いところにある豊島の「人柄の良さ」を感じる事ができた。

また、来年豊島に美術館ができることから、アートで地域おこしをしている2地域にも視察に行った。

* 直島

直島は豊島の隣にある島だが、アートによる地域おこしを始めてから、多くの観光客を集める島となっている。最初豊島に美術館ができると知ったときは全く想像がつかなかったが、直島を見ればイメージもつかみやすくなるだろうと思い、直島に視察に行った。視察では、「家プロジェクト」の本村地区、野外アートを中心に見てまわった。

しかし、直島に対し、私は「違和感」を強く感じた。路地に観光バスが乗り付け、住宅の密集した地域を大勢の観光客が散策し、騒いでいる様子。そして、唐突に現れるアート作品。アートのことはよく分からないので省くが、今まで地元の人しか歩いてなかったような路地に大勢の人が押し寄せているというところには、さすがに「アートによる地域おこし」の意義を考えてしまった。確かにたくさん観光客が訪れることによって経済は活性化するし、にぎわうかもしれない。しかしそれによって、もともからいた住民の平穏な生活が奪われてしまったのなら、直島にとってアートは本当に恩恵をもたらしたのだろうか、と疑問に思った。それと同時に、もし豊島にも美術館ができたら、同じように今までの生活を続けられなくなってしまうのではないか、と複雑だった。

直島では、「地域活性化」の難しさを強く感じた。

* 越後妻有

「アートによる地域おこし」の意義を考えている最中、12月に新潟県の越後妻有（新潟県十日町市と津南町）を視察した。越後妻有は新潟県南端に位置し、平成12年から「大地の芸術祭」というアートイベントが3年おきに開催されている。

「大地の芸術祭」は「地域全体が美術館」というようなコンセプトで、田園風景や里山の中にアート作品が置かれていたり、空き家や廃校、田んぼそのものを作品として「展示」している。そして、50日間の開催期間中に、約35万人もの観光客が押し寄せた（平成18年）。このような、アートをを用いた新しい地域づくりが、越後妻有では行われている。



まつだい農舞台（大地の芸術祭の総合センターの役割を持った施設）

越後妻有では、様々なアート施設を見学し、管理人の方々に話を聞くことができた。

越後妻有は新潟県中越地震（平成 16 年）を経験し、また豪雪地帯であり、高齢化・過疎化に悩まされている地域だった。しかし大地の芸術祭が開催されるようになってからは、ボランティアや観光客として都会から若者が大勢押し寄せ、中には移住する人もいた。雪国で閉鎖的な土地にボランティアスタッフ・観光客・アーティスト・地元住民などとの交流が生まれ、「世界が広がった（「うぶすなの家」管理人・水落静子さん）」。また、期間中、アート作品の横にテントを張って、地元の農産物や趣味で作っていた小物を売り出すなど、やりたかったけどやれなかったことが実現したそうだ。そして、そういうことを通して、地元をもっと好きになったと、みなさんは口々に話して下さった。

「観光客にもっと越後妻有を楽しんでもらいたいから、自分たちでペットボトルから風車を作り設置した。評判は上々で嬉しかった」と、「最後の教室」管理人・小野塚孝さん。アートがきっかけとなって、地元住民は工夫を楽しむようになった。



越後妻有を視察したことにより、今までよく分かっていなかった「アートが地域を元気にする」理由を理解することができた。アートができることで地域が活性化するのではなく、アートと地元住民がお互いをうまく利用し合うことによって、相乗効果で良くなっていくのだと思った。



これらの活動を踏まえ、3月に豊島で活動報告会を行った。報告会は私を含め3人の発表で構成され、約30~40人の豊島住民が集まった。昨年度のアンケート以来、不特定多数の豊島の方と接する機会をあまり持てなかったのが、改めて私たちの活動を報告することができ、大変有意義な会となった。

この前日には、豊島で一緒になって活動していた農事組合法人てしまむらのみなさんと、今年度の活動総括と反省をする会を行った。少人数での会だったので、たくさんの意見が出た。昨年度と比べ、豊島の方との交流が深まり、悪かった点も率直に言えるような雰囲気だった。その分耳には痛かったが、たくさんの反省点が出てきたことは良かったと思う。この会で出てきたたくさんの反省点を見直し、また、良かった点はさらに伸ばし、来年度以降の活動のパネにしていきたい。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクトにより、大学は、地域活性化にむけて積極的に住民と努力・連携し、地域との良い関係を築くことができたと思う。地域に根ざした大学として、地域に貢献できた。

また、地域社会（豊島）にとっては、外からの目で豊島の魅力を発掘し、時には問題点も伝え、活性化に向けての協力ができたと思う。また、反省会の中で出てきた話では、去年と同様、やはり学生が豊島に来てくれるだけで嬉しいし、張り切ってしまうと言って下さった。例えば、インタビューに答えてくださった兒島さんの奥さんは、反省会当日に、豊島の米から作った米粉でできたパンと、豊島の郷土料理である呉汁を作ってきて下さった。また、兒島さん自身も、学生によくツルカゴを作ってきて下さる。このように、私たちをもてなして下さることに嬉しさを感じると同時に、そうやってものを作ること、そして私たちが喜ぶことが豊島の方の喜びにもつながっていると感じ、良い関係が築けていると嬉しく思う。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

このプロジェクトで、地域活性化に積極的なたくさんの豊島の方達と関わることによって、大学卒業後も地域活性化に携わっていきたいと思う自分たちの将来のビジョンを描くことができたと思う。例えば、このプロジェクトは「とりあえず何でもやってみよう」という考えの中で進めてきた。そうやって何事にも積極的にスピーディーに取り組む中で、たくさんの問題点や良い点を次々と発見することができた。このように、地域活性化をするには、悩むよりもまず実践に移した方が良いということ、身をもって学ぶことができた。

また、このプロジェクトを通して、NPOの人、社会人、学生など、地域活性化に関心を持ったたくさんの人と知り合うことができた。そして、情報交換をしたりして、視野を広げることができた。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

上記のとおり勉強になった・ためになった点はたくさんあるが、この豊島での活動は、何よりも楽しかったことが私にとって1番だった。

「地域活性化」というと、堅苦しい・難しい・大変なイメージがあるが、何も無いところから工夫して何かを創り出すこと（例えば、竹林→間伐と流しそうめんイベント etc）や、魅力的な人たちと協力しつつ活動することは、日々新しい発見があって楽しかった。



しかし一方で、楽しいとばかり言っていられないのも事実である。学生にとってはたまに島に行き、楽しい思い出を作り、勉強し、帰って行くだけであるが、豊島に住んでいる方たちに

としてはそこに生活があるので、楽しいばかりではだめなのだ。

今年度は可能性を模索するために、様々なモデルツアーや絵地図づくりに取り組んだが、今年度はそれを形にするために、具体的に洗練していかなければならない。また、具体的な課題を明らかにして、それを1つずつ解決していかなければならない。そして何よりも大切なことが、向かうべき方向を明らかにすることだ。来年豊島に美術館ができることによって、これから豊島に様々な変化が起こるだろう。しかし、「美術館に頼らない地域づくり」を目指していくためにも、漠然と動くだけでは前に進まないと分かった。もちろん「とりあえず何でもやってみよう」という当初からの考えは変えるべきではないと思うが、来年度からはもう少し目指すイメージを明らかにしてやっていくべきなのかもしれない。

来年度も、豊島での活動は継続して行う。

今年度行われたモデルツアーは、豊島の方々が企画し、私たちが参加するという形のものがほとんどだった。しかし来年度からは、これまでの活動で得た情報・知識などをもとに、企画段階から学生も参加していきたい。

また、具体的には、まず豊島村誌のデータ化を行う。豊島村誌とは、大正3年に編集された豊島の地理や文化について述べられた資料であるが、筆で書かれているこの資料をデータ化し、誰でも容易に読むことができるようにする。また、この資料をこれからの調査などにも役立てていく。

また、今年度も行った絵地図づくりを、他の5集落に対しても行い、最終的には豊島の全ての集落の絵地図を完成させていきたい。

そのためにもまず、学生は豊島に足を運び、交流するところから始めていきたい。そして私は今年度で卒業だが、これからも豊島と関わっていきたい。



7. 実施メンバー

代表者 田中 美理 (経済学部4年)
構成員 平井 美希 (経済学部4年)
鈴木 晶子 (経済学部3年)
佐伯 知香 (経済学部3年)
水口 郁枝 (農学部 4年)
山畑 梓 (農学部 4年)